

■ 集団に関する用語

【集団/group】 社会学辞典(弘文堂)

特定の共同目標をかかげ、多少とも共属感をもち、相互作用を行っている複数の人々の社会的結合を、集団ないしは社会集団という。

最広義には実験室の中での未知の人々からなる被験者の集まりや、共通の標識をもつ個人の集まりである統計集団などを含む場合もある。

集団の共同目標はきわめて明確に特定されている場合もあり、一緒に集まっていることが暗黙の目標になっている場合もある。共属感が強いときには「われわれ感情」や「われわれ意識」と呼ばれるものになる場合がある。また集団内の相互作用は一時的で非組織的な場合もあり、持続的で組織的な場合もある。このように現実の集団は千差万別であるが、集団の本質的契機として(1)目標志向の共同性、(2)われわれ的融合の主体的共同性がある。

したがって、集団は相互作用および社会的行為を調整して共同性を保つための仕組みを「組織」という。そして組織を通じて調整を行う管理主体が存在するような集団を、M. ヴェーバーは「団体 Verband」と呼んだ。またソロキンらは組織の有無ないし発達一未発達を標識にして「組織集団」と「非組織集団」という類型をたてた。ヴィーゼは集団を狭義に考えて、群集と集団を抽象的集合体という三者を区別しており、持続性と組織性の欠如ないしは低度のものを群集とし、他方、それらの特質が高度で超個人的な価値を担うものを抽象的集合体(国家や教会など)とし、その中間に集団を位置づけた。

(集団の要件)

集団が現実存在するための基本要素として、(1)共同目標、(2)協労意欲、そして(3)コミュニケーションとしての相互作用、の三つが考えられる。

ここで協労意欲というのは個人が集団に参加して貢献しようとする動機のことであって、しばしば無関心や敵意という負の協労意欲を含むことがある。そして共同目標と協労意欲とを媒介しつつ実現していくプロセスがコミュニケーションであり、相互作用である。この過程は調整された活動パターン、すなわち集団の構造を形成し、いったん構造ができるとそれに規制されて展開する。

役割配分の構造と価値一規範の構造は特に重要である。集団活動の成功と失敗の基準は、共同目標の達成と参加者の欲求充足とを、ともに実現できるか否かということである。なぜなら参加者の欲求が集団を通じて満たされるならば、積極的な協労意欲が確保されるからである。しかし、しばしば目標達成と欲求充足とがアンバランスになったり実現されないことによって、集団は動揺し、解体する。

(集団の機能)

社会生活の維持にとって不可欠な課業を分担して達成することによって集団は社会全体に対して正機能を果たしている。さらに人々の諸行為を調整することによって社会秩序に貢献している。個々人に対しては個人単独では実現できない個人目標を、集団を通して実現できるということによって集団は個人の欲求充足の重要な手段である。

さらに集団所属によって個人は外界の危険から防衛され、集団の共同生活の中で自己表現をし、自己実現をはかるということによって、個人は集団に同一化し、自我を豊かにしうる。しかし、他方では、集団が目標達成をはかるあまり、社会的分業関係から逸脱して社会生活を混乱させたり、個人を拘束し抑圧するという負の機能をもっている。

【集団意識/group consciousness】 社会学辞典(弘文堂)

同一の集団に共属するという事実によって成員が分有する意識。

集団意識形成と維持は、(1)成員が集団目標への志向を共有し、集団規範に同調していることによって、(2)成員が対内的に密接な相互作用を行い、成員間の愛着が増大し、集団の内と外が区別されることによって、(3)成員間の主観的融合によるわれわれ感情の強まりによって、そして(4)なんらかの程度に成員が集団参加をつうじて個人的欲求を充足し帰属意識をもつということによって、可能となる、逆に、これらの諸条件を欠くほど、集団意識は弱くなる。

デュルケームは集団意識と集合意識とを同義なものと考えており、それは個々の成員の個人意識に対して外在的で拘束的な思考・感情・行動の様式だとしている。集団意識、なかでもその中核にある集団的価値・規範が社会化を通じて内面化される場合には集団意識は個人の内側から個人を導くことになる。

【集団心/group mind】 哲学辞典(平凡社)

マクドゥーガルによれば、個人の心的諸力の体系と同じように、社会も組織化されて一定の条件が満たされるなら、集団心が生じる。社会心、集合心ともいわれる。

彼はこの概念によって群衆行動、民族的性格を記述することを試みたが、集団や社会の基本的性格を説明するのに妥当でないといわれる。

【集団凝集性/ group cohesiveness】

メンバーを自発的に集団に留まらせる力の総体のこと。

凝集性の高い集団は、メンバー間での相互理解・受容、役割分化、類似した意見・態度、相互魅力などにより特徴づけられる場合が多い。

一般に凝集性は、メンバーの動機づけを高め、集団による課題遂行に正の効果をもつ。

しかし、集団意思決定場面などで、凝集性の高さがかえって決定の柔軟性や情報探索の範囲を狭めるといふ指摘もある。

【集団研究の始まり】

レヴィン以前の心理学では集団を真正面から取り扱うことは少なかった。

なぜなら

F.H.オルポート…集団に心があると考えてはならない。

集団に心があること…集団錯誤/group fallacy ← 非難

しかし

集団に属することで人の心が変化することも事実。

レヴィン…集団自体に心があると考えたわけではない。

「心理的な場」が存在すると考える。← 場の理論/field theory

$B=f(P \cdot E)$ ← 「B」=Behavior/行動、「P」=Personal factor/個人要因、「E」=Environment/環境

f()は関数を表し、カッコ内が変わること⇒の部分が変わることを表す。人間の行動は、個人の持っている性格と、その個人が属している環境・状況の2つによって変わる。

【集団規範/group norm】

集団内の大多数の成員が共有する判断の枠組や思考様式のこと。

集団成員として期待される行動の標準を示すもので、集団内での自己の適切な行動を選択する際の基準となる。また、他の成員に対する暗黙の役割期待を形成する基盤となって、他の成員の行動が許容範囲内であるか否かを判断する際の基準ともなる。

規範は、集団成員が相互作用を繰り返すなかで形成され、集団の発達とともに徐々に変容するが、急激な変化に対しては成員は心理的抵抗を示す。

集団内では日常は強く意識されることは少なく、規範からはずれた言動をとる者が現れることによって、周りの成員たちは規範の存在と内容を明瞭に意識するようになり、規範に同調するように直接的・間接的に集団圧力を加えるようになる。また、集団の外部からはその実態を把握することは難しいが、集団として解決すべき問題に直面した時の対処方略の決定の際に、その集団の規範の特性が表面化することも多い。

【シェリフ/Sherifによる自動光点運動/autokinetic effectの実験…集団規範の誕生】

自動光点運動…暗闇の中で小さく光る豆電球などの光点を見つめ続けていると、周りのものとの位置関係がわからないため、ふらふらと揺れているように見えるという現象。

まず、暗闇で見える光点がどの程度動いたかを「何センチ」と言った形で個人に報告させる。

→ 回答は人によってまちまち。(いうまでもなく、光点は動いていない。)

次に3人で同時に報告をさせる。

すると、個人ではばらばらだった移動距離が、報告を2回・3回と繰り返すにしたがってだんだん近づいていき、ある一定の範囲に収まる。

→ 3人の集団に規範が誕生。

もう一度個人で報告させた際にも、3人集団でできた規範にもとづいた判断を行う。

→ 規範は内在化され、個人に取り込まれる。

以上